

## 現代中国における日本研究概説（その二）：社会文化を中心に

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 王 敏   |
| 出版者 | 法政大学国際日本学研究所  |
| 雑誌名 | 国際日本学   |
| 巻   | 2   |
| ページ | 53-67   |
| 発行年 | 2005-03-31  |
| URL | <a href="http://doi.org/10.15002/00022566">http://doi.org/10.15002/00022566</a> |

# 現代中国における日本研究概説（その二） —社会文化を中心に—

王 敏

## 2 日中関係に左右された研究内容の多様化実現

中国における日本研究も改革開放の波に乗り、年ごとに発表の数が多くなっている実態は『国際日本学』第1号「現代中国における日本研究概説（その一）」（注①）で考察したところである。とくに90年代以降、その日本研究に広がりが見られることを明らかにした。しかし、研究対象国の日本に受け入れられる成果となると、少ないのが実情である（資料①）。客観的な基準が本質的な科学や物理の分野と違って、人文科学の分野は単純に成果を比較できるものではないことはいうまでもない。それぞれの国の文化という土壌に立って先人の研究が始まり、試行錯誤を重ねるものでもあろう。

日本研究の姿勢について、青木保が「地域のつながりを視点におく」、「多極的視点の導入」日本研究を提唱している。「そして、自国、自地域からのみ見た研究ではない「相互理解」的視点による研究の重要性を重ねて指摘しておきたい。」（注②）この姿勢はいかなる国、地域にも適応する普遍的なものと思われる。

繰り返して説明したい。中国の研究者は党・政府の意向を無視できない環境の中でイデオロギーに奉仕する研究を積んできた。現在も党・政府による学問の主導は基本的に維持されている。中国における日本研究は、個人が国家の枠の中で懸命に成果を出そうとしている。日本の研究者からは想像しがたい制約と環境が中国の研究者にあるといわねばならない。特殊な中国的な環境の中の日本研究が日本の研究者に特異な印象を与えるのもやむをえない。

重ねて強調したい。日本研究は日本社会とだけでなく中国社会とも深くか

かわりあっている。その中国社会は政府主導の改革開放のもたらした大衆化の進展によって大きく変貌し続けている。大衆化によって世界が近くなった。世界との「接軌」を求めようとする中国社会の一連の動きが日本研究にも投射しつつある。中国の日本研究も国外の評価を求める時代に入ったと思われる。

この「現代中国における日本研究概説（その二）」では、中国における代表的な日本研究家の論文をもとに最新の成果を位置づけながら、日本研究内容の多様化傾向を分析、紹介していきたい。

### （1）多様化を受容し始めた日本研究

中国における日本研究の成果は国家戦略の中に置かれているという見方が必要である。このような研究環境におかれて、評価できる論文は国際関係、日中関係の領域に多くなる。その中で中国社会科学院大学院教授・政府シンクタンク機関中共中央党史研究室研究員の林暁光（専門・日中関係）の論文「中国における対日政策の変遷 40年代後期～50年代中期」（注③）は一例である。

この林論文は、1945年の抗日戦争の勝利から新中国成立を経て50年代後期までをながめ、対日政策が中国共産党・政府により大きく3段階を経たことを示した。具体的には、45-49年の「日本軍国主義への米軍による寛容な対応への反対」政策、50-54年の「米国の日本長期占領反対」「片面的対日講和反対」政策、そして55-57年前半の「積極的に中日関係正常化を求める」政策という経緯をたどったという。

少し細かく見よう。林論文は45-49年までの中国は、国共内戦で国民党支援を明確にした米国に反発を強めるとともに日本の戦後処理策をめぐっても反対を明確にした。対日政策も日本を独占支配している米国の対日対中国政策に連携していたとしている。日本人民と連携して米日の反動派に反対することを希望するとの考え方を初めて明らかにしたのは建国宣言を間近にした49年7月である。中国共産党は「中日両国人民は団結し、米国の長期日本占領に反対する」と表明して、反動勢力と人民を区別した。以後、人民との連帯を対日外交の支柱にしたという。

東西両陣営の対立激化の中で誕生した新中国は、50-54年の間、ソ連・社会主義陣営「一辺倒」の外交方針をとくに堅持する。米国の長期日本占領に反対

を強める一方で、全面的対日講和をめざして日本民主化の論陣を張る。講和には新中国が中国を代表する合法的政府としてかかわることを主張した。人民との連帯を具体的に外交で示したのもこの50年代前半期である。朝鮮戦争の休戦で緊張緩和の兆しが現れるとすかさず、中国は日本との間で経済、文化の交流の拡大をはかって正式な国交回復を目指す路線へと変換した。52年に3人の国会議員の訪中を実現させたのをきっかけに、政財界のメンバーを活発に招待した。訪中メンバーに国交正常化早期実現を日本政府に働きかけることを、周恩来は期待したという。周恩来は、日本人の戦犯を寛大に処理し賠償金放棄も決断し、国交回復への環境整備に努力したことを事跡でもって明らかにした意義は大きい。

54年12月に党・政府は段階的な国交正常化構想を策定する。55年3月には対日工作委員会を設立し、民間レベルの外交チャンネルを築くことを目指した。日本とのパイプを太くすることによって、米国による中国への経済封鎖や中国の国際的孤立化を狙う封じ込めを打破する狙いがあった。だが米国追従を外交の基軸としていた日本政府は、中国との関係改善に積極的でなかった。岸政権のときに相互交流停止を余儀なくされて日中関係が冷え切った時期もあった。だが72年、国交正常化が実現する。周恩来が自ら指導して進めた「民間外交」の20年の蓄積による多大な成果であったという。

林論文は多くの資料を駆使している。党・政府関係の資料公開が厳しい中で、これまで知られていない資料発掘に努めたことがまず評価できる。中国ではとくに政治的な問題には世論調査の手法も取れないのである。論文の内容とするには、大量の資料をかき集め積み重ねるしかない。こういう状況にあって、林論文は豊富なデータで国交正常化に至る対日政策の変遷を裏付けることに成功しているといわねばならない。同類の論文の場合、資料よりも政治理念の枠に縛られ論文の骨組みが決まりがちである。これを打破するのは並大抵のことではない。林論文は党・政府の立場に立ちながら論点を展開させていくが、ともかく根気強く発掘した資料を使って結実させている。資料重視の書き方が日中関係の領域において一歩進んだと思われる。

続いて、分析に改革的傾向が見られる2人の論文をあげたい。政府のシンクタンク研究機関中国現代国際関係研究院・日本研究所副研究員の王珊（専門、

日本政治・国際関係)と南開大学日本研究院博士課程在籍の孫政の「新国家主義論」(注④)と、大連大学東アジア研究院教授・劉毅(専門、日本史・日中関係史)の「中国人の神道及び靖国神社に対する認識」(注⑤)である。

前者の孫論文は、新中国の位置から日本政治の本質に迫っている。それによると、戦前の極端な国家主義が根本的な失敗を見たにもかかわらず、形を変え戦後、再出発したとしている。日本の戦後改革は内外のさまざまな要因によって制約を受け、不徹底な部分を残した結果、戦前の国家主義は戦後日本政治のもろもろの要素として残留し新国家主義思想に変貌した。それは、戦後政治の各段階を経て発展をしてきたという。新国家主義思想と日本政治の相互運動に着目した孫は、新国家主義思想がどういった影響を及ぼすのか、今後の日本政治ひいては日本社会を分析する視点を提言した。

後者の劉論文は、日本の神道と靖国神社に対する中国人の認識を冷静に分析した点で画期的である。神道は祭祀によって宗教の根幹をなすが、とくに決まった経文のない原始宗教の面は否めず、仏教との間を揺れ動きながら民衆の心をとらえてきたという見方は日本人とおなじであろう。ところが明治維新後、天皇を最上位に置く体制で、実質的に「国教化」された。靖国神社の前身、東京招魂社は幕末・明治維新で官軍について戦って死んだ軍人を祭るために建立されたが、その後の靖国神社は、特定の神を祭るのではなく国民であること、護国神社という全国ネットワークを傘下にしていることなど極めて特殊な地位を持ち続けていると指摘した。このうえで歴史的に「軍国魂」のゆりかごとして侵略戦争の精神的土台となったとしている。一般の神社から隔絶した靖国神社に対する分析は中国政府の意向を代弁していると受け取られる恐れもあるが、中国だけでなく周辺諸国民も共有する見方であろうと言及し、日本の首相の靖国神社参拝は中国と周辺諸国民の心情を傷つけるものであるという。

二つの論文には、「大批判」方式に走らず、可能な限り客観描写に立脚しようとしているところが共通している。はっきり主張した論文を求める中国国内では、二つとも弱腰論文と扱われるかもしれない。日本にあっては、主観が前面に出た論説と見なされて学術論文的ではないとされることが多い。しかし、中国における論文のあり方に一石を投じるものと思われる。中国人の研究者が中国の特殊な環境の中で国外の研究者を意識しながら書いた点に理解を示した

いと思うのである。

また、多様化する価値観を受容した研究がとくに日中交流や国際関係の領域で目立つ。筆者の参加した北京の中国社会科学院日本研究所主宰のシンポジウム「日中青年論壇」（02年12月6—8日）がその傾向を示した。そのシンポで発表し加筆した北京大学国際関係学院教授の尚会鵬（専門・日中関係、国際関係）の論文「儒家的戦略文化と中国人の日本観の深層」は興味深い。

尚論文によると、現代中国人の日本観の戸惑いは古代中国の儒家思想に拘束されたものであるという。儒家思想の創始者孔子が説く「仁」「礼」「和」といった理念は、一般的には個人の修養すべき徳目と捉えられている。しかし、古代では対外認識のための基本概念であり、世界秩序の理想概念でもある。事実、古代中国が周辺地域との間で築いた「華夷」秩序は「仁」「礼」「和」といった理念に基づく秩序であった。それは、帝国主義国と植民地の支配・被支配の関係ではなかった。武力による統治・従属の否定のうえに成り立った。文明・文化の吸引力をもとにした関係であった。高度文明として中華文明に同化・融合したい意思さえあれば、「夷」の周辺地域は主体性を保持できたところに特徴がある。対日認識も近世までは「華夷」秩序観を基本としてきた。

しかし、19世紀末以降、日本が武力でもって中国に対し侵略行為に及んだとき、中国人は伝統的な中国文明の求心力による秩序構築の理念が破壊されたとし、文化を与えた国に「恩を仇で返す国」と感じた。文化の施恩者が被害者になったという意識が強まるにつれ、愛国主義と反日意識が狭い民族感情の袋小路に走った傾向があると見る。日本の軍国主義への抜きがたい不信感がもたらした病弊である。儒家思想を信念にしている中国人が一般的なので、対日不信を払拭するのは容易ではないが、過去の不幸な歴史を教訓として学ぶことを基本に、中国人は客観的な日本認識を樹立していく必要を説く。日本も歴史に学ぶ姿勢をとることが真の友好関係を取り戻す道だと提唱している。

日中交流のあり方をめぐる研究には踏み込んだものが最近多くなった。研究の思考も成果の活用も国策と結びつく中で2002年12月、『戦略と管理』誌に人民日報論説委員・馬立誠が「対日新思考」を載せた。日中関係に対して前向き姿勢の「新思考」がその後も相次ぎ発表された。03年1月号の『中日関係史学会会報』に中国社会科学院日本研究所・馮昭奎が「歴史から未来へ」を発表し、

日中両国は互いに「強強型」にかわった現状認識をもとに等身大の交流の必要性を指摘した。03年2月17日、中共中央党校常務副学長・虞雲耀が「若干の戦略問題」と題した講演で、中国共産党第16回代表大会を通した「以隣為善」の外交方針を日中関係にも擦りあわせるべきだと主張した。このように、中国で日中関係に前向きの新思考の所論が相次いでいるが、多くに共通するのは国家を意識する大前提の中で展開されていることを見逃すわけにはいかない。これを逸脱しない限り、学会で発表され、国内外に発信できるのである。

## (2) 日本学構築に結びつく日本研究叢書の出版

日中国交回復30周年の2002年にあわせて、中国では、日本研究機関が記念シンポジウムを、出版界でも多くの特集を組んだ。この全体を知るには政府による調査を待つしかない。中華日本学会と北京日本学研究センターによる全国調査が1996年12月現在で行われて以後（2003年まで）は公式のデータがなく、個別に情報を集めるしかない状況が続いている。このため日本研究の実態は推し量るしかないために不完全さは否めない。

そんな中、21世紀に入ってから社会文化中心の研究成果の大型の出版企画が目立っている。たとえば、北京日本学研究センター所長・徐一平、浙江工商大学日本語文化学院院长・王勇などが中心に編集した『日本学基礎精選叢書』（高等教育出版社）の出版が1998年にスタートし、2003年には8冊、『日本文化』『日本経済』『日本社会』『日本言語』『日本文学』『日本歴史』『日本文学』『日本芸術』を予定通り全部発行した。同叢書が日本の信仰・民俗・慣習を含めて社会・文化の総合的な研究を凝集したものであり、日本研究に活力を注ぎこんだことは間違いない。

ちなみに、日本研究の大型叢書『戦後日本叢書』が88年北京・航空工業出版社から発刊されたことがある。その背景には80年代初め、政府による全国日本学科企画指導班の発足がある。同班の指示に基づき、中国社会科学院日本研究所が中心に編纂した。中国における重要な叢書といえるもので、参考に書名を記しておく。

金明善他 『戦後日本経済発展史（之一）』

- 金明善監修『戦後日本産業政策（之二）』  
 盛継勤監修『戦後国民経済基礎結構（之三）』  
 任文侠監修『日本の広観经济管理（之四）』  
 孫執中監修『戦後日本財政（之五）』  
 鄭勵志監修『日本対外貿易（之六）』  
 金泰相他監修『戦後日本独占資本（之七）』  
 情関南他『戦後日本政治（之八）』  
 王琥生他編『戦後日本経済社会統計（之九）』

中国における日本研究機関としての成果は増えている。いずれも歴史は長くないが、発足早々実績を上げるのも少なくない。その中から顕著な4カ所を紹介する。

#### ①南開大学日本研究院

南開大学日本研究院が2003年4月創立した。「日本史と文化」、「現代日本経済」、「現代日本政治と対外関係」の3部門から構成される。1964年に日本史研究室として生まれ、その後、日本の万博記念協会や国際交流基金、日本人有志などの助成・協力を得つつ国際的学术交流実施や設備の充実に努めてきた。現在では博士号所持者4人を含む7人の教師のほかに、外部からの招聘教授も多数擁し、中国における代表的な日本研究機関として活動を行っている。

同センターは設立してから2001年まで専門著作179部、翻訳著作87部、辞書34部、論文776篇を出版または発表した。その中で、海外で出版した専門書8部、発表した論文は98篇となっている。また、1997年以来、「日本歴史と現状の再検討」、「中国における日本学研究的現状と展望」、「国際通貨金融システムと東アジア」、「国際関係と東アジアの安全保障」、「変動期の東アジア社会と文化」、「グローバリゼーションと東アジアの政治、行政改革」等を特定テーマとして、国際学術会議を開催した。

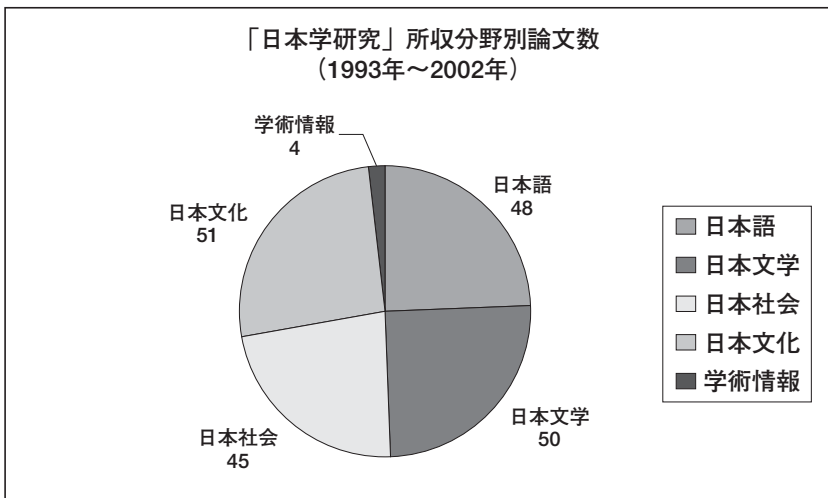
主な学術刊行物に『日本研究論文集』（センター季刊誌、年刊）、『南開日本研究叢書』、『国際会議論文集』、『日研季刊』などがある。



## ②北京日本学研究中心

1985年、中国・国家教育部と日本・国際交流基金によって、日中間の教育文化交流を促進する目的で設立された。両機関および在中国日本大使館の協力、北京外国語大学の指導のもとにある研究機関である。前身は1979年大平首相訪中の時に調印された文化交流協定に基づく「全国日本語教師トレーニングクラス」（いわゆる「大平クラス」）である。現在では、日中交流の研究・教育機関として中国において中心的な役割を担っている。97年まで同センターは修士200人以上、教員300人以上を養成し、『日本学刊』『日本学研究』などの日本研究誌を発刊した。これら研究誌の特徴は従来の政治、経済中心のあり方と違って、社会文化を中心内容にしたところである。1993年～2002年発刊の『日本学研究』の掲載項目を分類、整理した統計を通して、社会文化重視の特徴がよくわかる。

| 分野   | 論文数 | %  |
|------|-----|----|
| 日本語  |     | 48 |
| 日本文学 |     | 50 |
| 日本社会 |     | 45 |
| 日本文化 |     | 51 |
| 学術情報 |     | 4  |
| 計    | 198 |    |



現在、同センターの専任教員が十一名ある。ほとんど日本留学経験を持ち、博士学位をとった、五十代以下になっている。このような人事構成がもう一つの特徴としてあげられよう。

### ③浙江工商大学日本語言文化学院

同学院の前身は浙江大学日本文化研究所であった。研究所は1989年の設立。1993年、浙江省教育委員会の研究機関に昇格した。1995年、国連教育科学文化機関（ユネスコ）によって「世界の主要な日本研究機関」の一つとして認定した。現在、専任6人（教授2人、助教授2人、講師1人、事務担当1人）が中心となり、古代から近代にいたる中日関係研究を進め、日本からの留学生も含む大学院生の指導や国際シンポジウムの開催なども活発に行っている。日本文化研究の中心に位置付けられている同所の業績が驚くほどであった。2004年、研究所が浙江工商大学に移され、日本語言文化学院として再スタートした。

### ④中国海洋大学

1924年の創立。「青島海洋大学」が2002年に改称された。80年の歴史を誇り、1万5千人超の学生を擁する、中国国家教育委員会直属の13重点大学の一枚である。海洋大学の名を冠しているが、文学、経済学、経営学、法学、工学などの学部を備えた総合大学である。日本研究の歴史は長くないが、村上春樹の全作品を中国に翻訳、紹介した名訳者林少華を教授に迎えてから、日本と関係する目玉大学に変身しつつある。

日本研究の実績を競わせる環境整備に取り組んだ結果、日本研究は90年代以後、「高度経済成長」に入ったと見られる。「思想解放」によって生まれ変わった日本研究の結実を中国における日本研究は改革開放の進展に伴って、着実に裾野を広げているのである。しかし、その日本研究の内容ははたして、学究的に世界に通用する成果といえようか。今後の研究、分析が深まっていくことを期待しよう。なお、筆者は以上にあげた研究機関の成果に注目していきたいと思っている。

## (3) 文献研究手法によるモデル論文

王勇の「日本発信の扇子の源流を探る」、王宝平の「黄遵宪著「日本国史」考証」、王晓平の「万葉集と敦煌文献」、呂順長の「清代日本考察団の活動をめぐる分析」(注⑥)はいずれも日中の文献を渉猟し検証を重視したモデル論文と評価されている。長い歴史を有する中国であるが、清代の考証学は現在も実証的な論文構成法として命脈を保っている。しかし、因習的な研究法と見られていた時期があった。4人の研究者は文献比較の方法や考証学のいいところを取り入れながら、ひとつの論を組み立てる個性的な研究法を修得された。社会主義イデオロギーがすべての分野の指導思想になった環境の中で、その枠にとらわれずに基礎研究を進めているのはみごとである。今や地道な基礎研究が要請される時代に中国も入ったことをうかがわせる。

ついでに4人の論文要旨を簡単に紹介する。

## ①王勇の「日本式扇子の起源と中国における伝播」

「扇」は古くは「箒」と称した。『説文解字』には「箒、扇也。」とある。おおよそ殷周時代に、縄でつるす形から次第に手で持つ長い柄の形になり、扇面は縮小して四角や円形になり、このようにして「方扇」または「团扇」というものが出てきた。

隋唐時代、团扇は中華文明の産物として東アジア諸国を風靡したが、これは日本や中国の彫像・絵画資料の中から十分な証左を得ることができる。しかし、北宋年間に、方形・円形に限らず自在に開いたり閉じたりできる「扇子」が次第に中華文明圏の外から中国に流入してくるようになり、中国の伝統的な扇の範疇に対して大きな衝撃となり、ついには次第に团扇に取って代わって、扇のさまざまな種類の中で第一の座を占めるようになった。

日本の桧扇は、簡冊から次第に変化したという可能性が非常に高く、また木簡と簡冊は全て中国の発明であるが、その機能においても中国の扇を越えるものを創り出した。また、蝙蝠扇は紙扇として作られ、宋代に中国に流入し、明代にその折り畳みできる機能が持てはやされ、中国で流行した。その後、この折畳式の扇子を模倣した中国独自の「杭扇」が作られ、日本に逆輸入され、またヨーロッパにも伝播して、現代の扇の基礎となった。

## ②王宝平の「黄遵憲著『日本国志』における引用書目の考釈」

黄遵憲の『日本国志』は、中国人にとって日本を研究するための古典的著作であるが、近代中国の生成に対しても非常に大きな影響を与え、そのことについて既に多くの研究成果が世に問われている。しかし、この書物の学術的価値を正確に評価するならば、まずはじめに必要なのはその引用文献を整理することであり、次にそこからどれが黄遵憲の独創の部分で、どれが他の資料からの引用の部分なのかを分類することである。

この書物は、地理志、學術志、礼俗志、工芸志の部分に、大量の『日本地誌提要』『芸苑日涉』そして『国史紀事本末』の3書を引用しており、この部分の内容、並びにそれが作者の独創が完全ではないということを証明している。しかし、その引用には非常に顕著な以下の特徴がある。

まず、『日本国志』が引用するこれらの書物はみなその当時の学術性の高い著作であり、黄遵憲が日本に滞在中に広範囲の文献からとくに惹かれて採用したいってよいものであるが、これは彼がよい資料を鑑別する眼識を備えていたことをよく説明するものである。

次に、引用に際して、資料を取捨するときに、自分というものを中心に据える主体的意思が現れている。黄遵憲はこれほど繁多な資料に対して、検討をせず鵜呑みするというのではなく、いいかげんに資料を切り詰めたりすることもなく、充分な理解を基礎にした上にそれらを有機的に『日本国志』に受け入れた。それは著者である自分を主に置く、すなわち自分の用いるものを主とする主体的意識、および資料を高度に制御し処理する能力の現れである。

第三に、引用の厳正さが特徴的である。黄遵憲は参事官としても強烈的な使命感を持って『日本国志』を編纂し、光緒8年(1882)に初稿完成後、修訂の暇がなかったため、1885年、彼は一切の招致を断わって、官を辞し故郷に還り、光緒13年(1887)夏にとうとう最終校訂稿を出したほどである。たとえば『日本国志』神道部では、全部で13カ所の間違いの中で、多くは同音の字や文字の形が似ていることが原因となる書き誤り、その他は単純な筆の誤りや校訂上の見落としが大半で、実質的な錯誤は非常に少ない。

中日両国は同じ漢字文化圏に属し、悠久の書籍交流の歴史を持っている。しかし、時代の制約によって、時としてその往還の規模が縮小したり、断絶した

りした時代もあった。1871年に中日修好条約が締結され、相互の首都に外交使節の駐在が始まったが、このことは書籍の交流を始めるためには非常に良好な条件となった。黄遵憲を代表とする優秀な知識人はこの天与の千載一遇の機会を利用して十分に日本の豊富で多彩な資料を駆使し、日本研究に著しい効果をあげた。このことは、これ以後の中国日本間の書籍の交流がかつてないほどの更に高い段階に進んだことを表している。

### ③王暁平の「敦煌文学文献と『万葉集』における漢文」

奈良時代の文学者は中国の古典に慣れ親しんでいた。中には中国で散逸したものも多く、中国文学史の研究に役立つことも多い。とくに注目されるのが前世紀に発見された「敦煌文献」と呼ばれるものだ。従来の正統派文学以外の宗教学などを多く含んでいるもので、所収の「貧窮田舎漢」と山上憶良の「貧窮問答歌」、「千字文」と大伴家持の書簡の関係など、研究も各方面で始まっている。たとえば大伴家持が大伴池主からもらった歌に対して、「戚謝歓怡」と謝辞を述べているが、従来これは「感謝する」と解釈されてきたが、もともとあった中国側の文献と照合すると「(地方で暮らす池主の苦労を思う)心配事が去って、安心した」とも読めることがわかる。

中国では「文選」など正統派の文学から、文学史を語ることが多いが、奈良朝の文学者はそれ以外の「敦煌文学」など幅広い範囲で興味を持ち、一部用法の間違いなどあるものの、自分の文章として使いこなしてきたことがわかる。

清代は、日本の書籍が西のかた中国へ向け、大量にもたらされた時代であり、そこには多くの人物が携わり、また、多くのエピソードが生まれた。これらについては、系統的かつ全面的な研究を進める必要があろうが、本論文は、清代における中日書籍文化交流史の一部分——清代の訪日視察官の在日訪書活動に考察範囲を限り検討しようとするものである。しかし、彼らが尋ね求めた書籍は、中国から東漸した典籍や、日本人が著した和漢書などの「旧書」はもちろん、当時の中国人が高い関心を寄せていた政治、経済、文化など各方面の「新刊書」を含む、幅広いものであったのである。

## ④呂順長の「清代訪日視察官の日本における訪書について」

清代、日本の書籍が、かつてない規模と数量をもって中国へと伝えられた。そしてそれに携わったのは、商人、駐日使節、訪日視察官から、留学生、日本へ旅した文人や政治活動家、あるいは、中国へ渡った日本人など、実にさまざまな人々であった。中でも、清末に日本を訪れた視察官による訪書活動は、特別な歴史背景のもとで行われた、極めて特殊な文化活動であった。今、清代訪日視察官の訪書活動に注目するのは、訪書に携わった人数が多く、また、持ち帰った書籍が大量であったということのみからではない。彼らが求めた書籍は、中国からかつて日本にもたらされ伝存されてきた典籍や、日本人が著した和漢書などの「旧書」に限らず、当時の中国人が高い関心を抱いていた政治、経済、文化などの各方面に関する「新刊書」を含むものであり、このこともまた、彼らが残した注目すべき業績といえるのである。そして彼らの活動は、中国から海を越えて日本に伝えられていた典籍の回帰、そしてまた、中国の近代化事業の促進にとっても、重要な役割を果たすものとなったのである。

文献研究の重要性を意識するようになって来たことに関連して、戦後日本の思想家の丸山真男に注目した研究が深化を見せていることに言及しておきたい。とくに『日本政治思想史研究』（注⑦）が研究者の中で読まれている。丸山が注目されだしたのは90年代であった。その動機を探れば、丸山が、荻生徂徠に近現代思想との内在的な関係を見つめているからである。徂徠が儒学の近代化に果たした大家であるなら、儒教研究のうえで中国の研究家は見過ごせない。徂徠は理性が社会行動と政治制度の正当性の基礎としており、中国生まれの儒学に学びながら日本独自の儒教に発展させたとされる。徂徠儒学は、西洋の近代化を推進させた合理的理性の起源がプロテスタンティズムにあるという説を髣髴とさせる。東アジア近代社会の形成が単純に西洋近代社会の制度と思想の導入と学習に帰せしめることはできないという可能性を抱かせる。

自国の固有思想の儒教をどう見直すか、中国では、儒教再検証にボーダーレスの視点を示唆するものとして丸山研究が取り組まれたのだというわけである。儒家思想のすべてが近代化の阻害要因であったか、この基礎的な検証が中国には欠かせない。たとえば、香港中文大学当代中国文化研究センター主任・

金観壽教授が中国近代思想の諸流派は儒家思想の明末清初における新流派と深層部分において同一の構造を持っていることと説く（注⑧）。また、台湾の学者陳榮開の「荻生徂徠的朱子学批判」（注⑨）も同じ視点である。

関心と呼ぶ丸山研究の背景が当然考えられる。儒家思想のプラス面も積極的に見ていこうという流れがでてきたことに象徴されるように、多様性が受容される社会に中国が変質しつつあることが大きいといわねばならない。儒家思想の批判一点張りだったのはつい最近の過去のことであるが、中国社会の変わりよりの激しさを表している。研究者も転換期にあることを自覚しなければならぬことを告げているようである。日本研究も新世紀を構築していく強い力を持つ必要がある。党・政府主導のもとでの日本研究にさらなる激変が現れるのと推測する。

（続く）

#### 注釈

- ① 法政大学国際日本学研究中心、国際日本学研究所編・発行 2003年10月
- ② 北京日本研究センター編『日本学研究』13号「グローバル化の中の東アジアと日本研究」（講演要旨）（中国・外語教学与研究出版社 2003年12月）
- ③ 中国語論文が北京日本研究センター編『日本学研究』11号（中国・国際文化出版公司発行・2002年）発表されていた。
- ④ 特別寄稿・2003年10月（王敏編著『「意」の文化と「情」の文化』に収入。2004年10月、中公叢書）
- ⑤ 中国社会科学院日本研究所主宰のシンポジウム「日中青年論壇」（02年12月6—8日）で発表した後、さらに加筆した論文の特別寄稿
- ⑥ 5人の論文はいずれも特別寄稿 2003年10月（王敏編著『「意」の文化と「情」の文化』に収入。2004年10月、中公叢書）
- ⑦ 北京・三聯書店・2000年・王中江訳
- ⑧ 愛知大学21世紀COEプログラム国際シンポジウム『激動する世界と中国—現代中国学の構築に向けて—』での講演録 「思想史と21世紀の中国研究—近代性についての再考」 2003年10月1日
- ⑨ 『儒家思想在現代東亞・日本篇』・台北中央研究院中国文哲研究所・2000年

参考資料

①中国人の受賞作品一覧（段躍中『現代中国人の日本留学』 明石書店 2003年1月）

中国人的受賞作品一覧

| 著者名 | 书名                        | 賞名/受賞年           |
|-----|---------------------------|------------------|
| 王敏  | 谢谢宫泽贤治(河出书房新社)            | 岩手日报文学赏/1997     |
| 王柯  | 东土耳其斯坦共和国研究<br>(东京大学出版社)  | 三得利学艺赏/1996      |
| 黄磷  | 流通空间构造的动态分析<br>(千仓书房)     | 日本商业学会学会赏/1993   |
| 严安生 | 日本留学精神史(岩波书房)             | 第19回大佛次郎赏/1992   |
| 严善平 | 中国经济的成长与构造<br>(劲草书房)      | 地域农林经济学会赏/1994   |
| 严善平 | 中国农村、农业经济的转换<br>(劲草书房)    | 日本经济农业学会奖励赏/1998 |
| 朱建荣 | 毛泽东的朝鲜战争(岩波书店)            | 第4回亚洲太平洋特别赏/1992 |
| 朱建荣 | 毛泽东的朝鲜战争(岩波书店)            | 第8回太平正芳纪念赏/1992  |
| 周牧之 | 机电一体化革命与新国际分工<br>(密涅瓦出版社) | 电气通信普及财团奖励赏/1998 |
| 孙久富 | 万叶集与中国古典的比较研究<br>(新典社)    | 第9回上代文学赏/1992    |
| 张竞  | 近代中国与“恋爱”的发现<br>(岩波书店)    | 三得利学艺赏/1995      |
| 张竞  | 恋的中国文明史(筑摩书房)             | 读卖文学赏/1995       |
| 唐亚明 | 哪吒与龙王(讲谈社)                | 讲谈社出版文化赏绘本赏/1991 |
| 唐亚明 | 西游记(讲谈社)                  | 产经儿童出版文化赏/1995   |
| 唐亮  | 现代中国的政党关系<br>(庆应义塾大学出版会)  | 发展中国家研究奖励赏/1998  |
| 梅兰  | 我在努力(日新报导)                | 文部大臣特别赏/1994     |
| 班忠义 | 曾祖母的海(朝日新闻社)              | 朝日阶梯杂志报告文学赏/1992 |
| 李春利 | 现代中国的汽车工业<br>(信山社出版)      | 国际实业研究会学会赏/1997  |
| 刘岸伟 | 东洋人的悲哀(河出书房新社)            | 三得利学艺赏/1992      |
| 刘岸丽 | 风云北京(河出书房新社)              | 第4回莲如赏/1997      |
| 刘杰  | 日中战争下的外交(吉川弘文馆)           | 大平正芳赏/1996       |
| 刘香织 | 断发(朝日新闻社)                 | 亚洲・太平洋赏特别赏/1991  |
| 刘香织 | 断发(朝日新闻社)                 | 三得利学艺赏/1990      |
| 刘德强 | 中国的微观经济改革<br>(日本经济新闻社)    | 日经・经济图书文化赏/1995  |
| 轟莉莉 | 刘堡(东京大学出版社)               | 涩泽赏/1993         |

WangMin